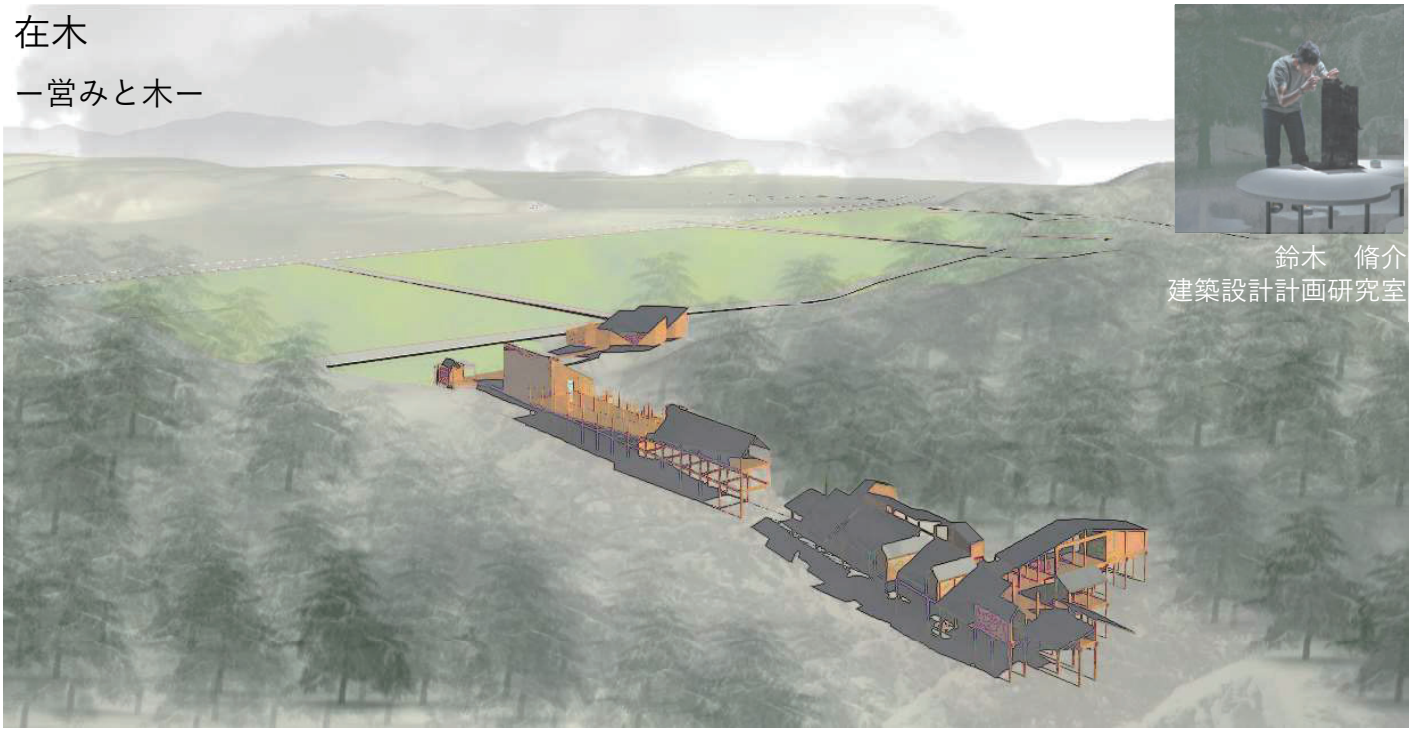
在木

ー営みと木ー



鈴木　脩介
建築設計計画研究室

日常に木を顕在化させる貯木場

・2019年の台風15号・19号の影響で多数の倒木が発生した。調査結果によると非赤枯れ性溝腐れ病という病を患ったサンブスギによるものが多かったとされている。千葉県森林組合では、病を患ったサンブスギを伐採し健全な山林を目指すことを計画しているが課題は多い。そこで、山から伐り出される木材が集積するポイントに建築を計画し、木材と人が親和する施設を目指す。

プログラム

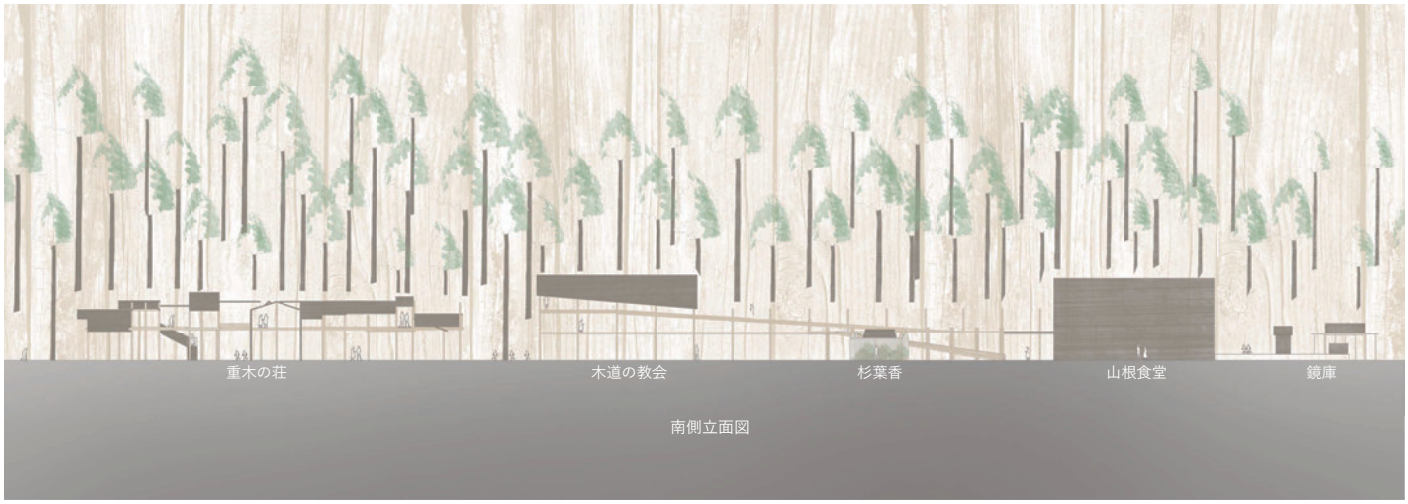
・敷地は千葉県山武市にある三方がスギ林に囲まれている谷地に計画する。ここは標高こそ低いものの小さな山が点在し、多量の杉が植生している。それらはサンブスギと呼ばれ地域に愛されるブランド杉の生産地である。
・この計画は林業の長期サイクルを考慮し伐採を第一段階、製材乾燥までを第二段階、それ以降を第三段階とし、施業計画や施設のキャパシティに応じて使い手が増・改築していくものと考え、第二段階までを設計している。

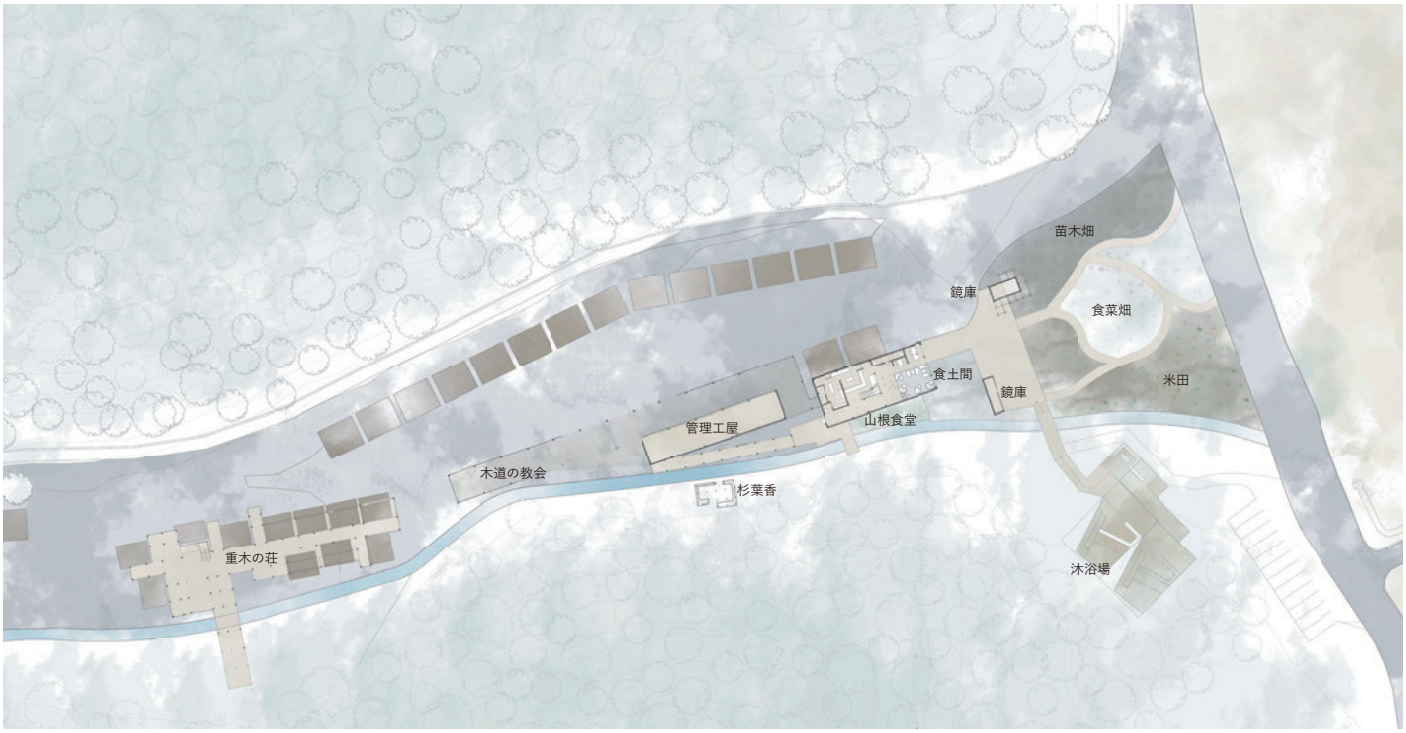
建築発生ダイアグラム

林業の循環が建築の形態に作用し、使い手によって更新され変容する。

第一段階	第二段階	第三段階	第四段階
適伐期を迎えているサンブスギの植生地を計画地とする	伐採を開始、原木や製材を貯木管理出来る建築を計画	伐採が進み、貯木キャパシティがオーバーし始める。	建築の増築と植樹

樹木の伐採によって生じた木材の保管・貯木のための建築は、その空間のキャパシティや時期によって変化していく。
第二段階までを想定した建築を計画し、その後は使い手によって更新されていく。





杉葉香（すぎばこ）

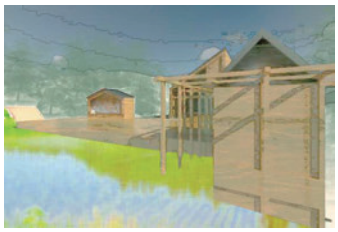
・この建築は枝打ち等で排出される杉の葉を水車の動力ですりつぶし、線香やアロマの基となる香料を生産するコンポストである。東屋の躯体をワイヤーメッシュで包み込んだ壁体内に杉野はを処分し、すり潰すものと土に還るものの時間変化をファサードに顕在化させる。生産時にはすりこ木からおとも聞こえる。

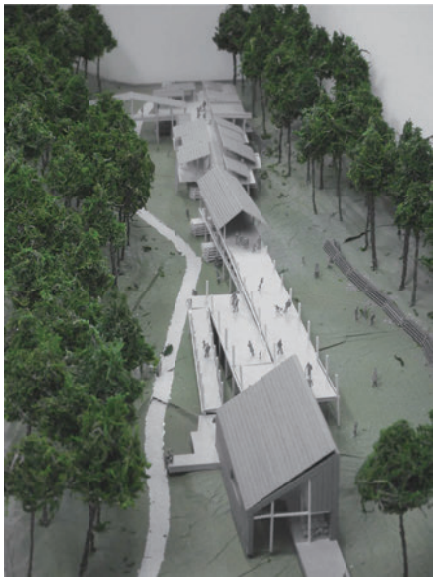
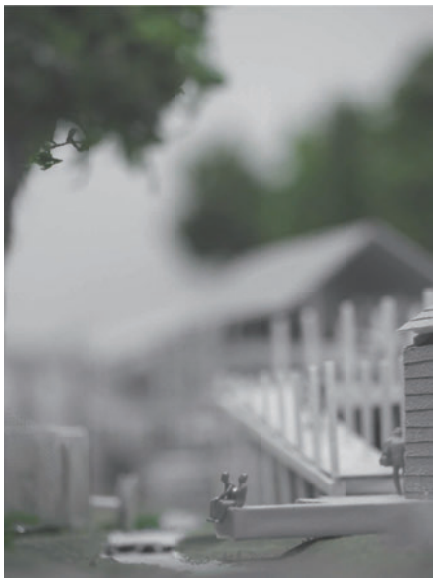
山根食堂（やまんねしょくどう）

・この食堂は、地元の山林で獲れた猪や鹿などのジビエ料理が味わえる。天気がいい日は食土間に出て、杉の切株を使ったスウェーデントーチで料理をふるまう。屋根、壁は杉の皮を使い、山との一体感を生み出す。

鏡庫（かがみこ）

・この建築は、稲刈り後の穂掛けを建築躯体で行うことが出来る。分棟では壁体の一部をガラスにすることで、収穫、消費量の推移を目視で確認できる、生活のレベルゲージとなる。普段は米鏡祭や夜間は蔵シネマの上映を行うことが出来る。



木道の教会（もくどうのきょうかい）

・この教会は谷に沿って緩やかに昇る教会である。外壁は無く常に開放され、日常使いに対応できる住民の寄り合い場となっている。足元に製材を貯える機能を持ち、空いている時は大きな屋根となりイベントを開くこともできる。